



盆栽，命のある芸術彫刻—盆栽を愛する日本の人々

盆栽との出会い

昨年秋、家族と香川県へ旅行し、高松の民泊を利用していた。オーナーは、高松が盆栽の最大の産地で、盆栽を見ることも魅力的な観光コンテンツと紹介してくれた。これは、私が日本の盆栽文化について少し学ぶ機会になったのだ。

盆栽は天然木の縮小形態である。1200年前の中国の株盆景に由来するもので、中国の唐王朝の人気盆栽が平安時代に日本に入った後、日本人は造形において独自の発展を遂げてきた。盆栽の植物が山に生えていた場合、その寿命は人間の寿命よりもはるかに長くなり、盆栽は同様の野生植物よりも長く生きると言われている。多くの盆栽銘品は百年以上なものであり、数百年のものはさらに貴重になる。このような盆栽は多くの所有者をわたり、今日までさまざまな人によってケアされ、大切にされてきた。

民泊オーナーの案内で、私たちははるちゃん盆栽園に来た。三代目園主の岡田利幸さんは、盆栽環境で育ち、52歳で大企業を辞め、父の盆栽産業を引き継いだ自己紹介し、高松の盆栽の話をしてくれた。

はるちゃん盆栽園

高松市の北側は瀬戸内海に面し、瀬戸内海の沿岸とその周辺に多くの黒松が自生している。この地域は気候が温暖で、日差しが長く、雨が少なく、水はけのよい砂壤土で育った松は「根腐れしにくく、傷まない」として定評がある。年中海風に吹かれていることに加えて、樹形が美しい。

高松の盆栽は200年以上の歴史を持っている。1920年、接ぎ木技術が確立されたことによって、盆栽栽培は地元の農家の副業となった。戦争の貧困と急速な経済発展を経験した後、1970年代に高松は盆栽の全盛期を迎え、300以上の盆栽農家があった。松の盆栽の最大の生産地として、国内市場の約80%を占めていた。しかし今は、盆栽に従事している世帯は200未満であり、岡田さんは盆栽生産を継続していた業者の1人である。



HARUCHAN 園主 岡田利幸さん

盆栽は生きた植物であり、所有者の接する気持ちと技術は木の成長状態に反映される。盆栽は土が少ないため、毎日水やりをしなければならず、夏には2~3回必要である。一回だけでもいい加減にしたら、盆栽は傷まれ、価値が落ちてしまう。盆栽家業を継いでから、岡田さんは他のことができず、旅行することはさらに不可能である。盆栽に愛着があり、心配もするので、作業場にいることは落ち着くと話した。

盆栽ブームの昔話

はるちゃん盆栽園では、青々で、形の綺麗な盆栽に感心せずにはいられない。別れるとき、岡田さんから「10月の桜」の盆栽をいただいた。これは秋と春に2度咲く品種と説明された。盆栽がわからない人でもその美しい姿に魅了されるだろう。好奇心に駆られて、愛知県の盆栽業者や盆栽サークルに日本の盆栽について教えてもらうことにした。

盆栽 十月桜

盆栽愛好家はだまかに2種類に分かれるそうである。

一つは、盆栽を植え、ケアするプロセスで木の成長と変化を楽しむ人々である。彼らは毎日水の管理、草取り、季節によって肥料の与え、虫・病気の対策や剪定など、手作業で新しい芽を観察し、茎表皮と葉脈のわずかな変化から驚きと喜びを感じる。盆栽は彼らの人生の友のような存在であり、このような趣味は多くの金をかけなくても楽しむことができる。

もう一つのタイプは、形が整った盆栽を楽しむ人々である。自ら盆栽の世話をせず、置物としての盆栽を楽しむ。高価な盆栽の世話は、プロに任せ、盆栽の所有における満足感と誇りに満たされる。そのようなことから、「盆栽は金持ちの趣味である」と人々に誤解を与えることもある。

さまざまな愛好家がいるが、植物の美しい姿、植物と鉢の調和、時に伴う変化は、盆栽愛好家を魅了する共通の特徴である。

40 数年前、生活が豊かになった日本人は時間と遊びにお金を費やす余裕を持つようになった。余暇や娯楽があまりなかった時代には、かつて上流社会や文化人の中ではやっていた盆栽が普通の人々の中でブームとなった。当時、最も人気のあった盆栽は栽培しやすいさつきであった。さつきの苗を買い、多くの人はブームに乗って盆栽の趣味を始めた。休みの日は、男たちは植物の世話をしたり、盆栽の経験を話し合ったり、自慢の盆栽作品を他の人に見せたりすることは喜びであった。



さつき

盆栽が好きな人は盆栽をいくつ持っているか？ 盆栽には多くの種類と異なる個性があるため、彼らは知らないうちに盆栽の種類が増えてしまう。個人差はあるが、初心者でも 10 個ぐらいあり、100 鉢以上、さらには 300 鉢以上を所有しているディープなファンも少なくなかった。消費者が多いため、盆栽の生産と販売は好況で、盆栽の市は常に混んでいる状態であり、日本の盆栽の全盛期であった。

一つの盆栽が形になるには 10 年かかり、盆栽の基本を熟知するには 20 年かかると言われている。世の中の暮らしの変化や娯楽道が増えたことつれ、忙しさと効率を追求ようになることによって、盆栽は「面倒」「高齢者の趣味」とのイメージになってしまった。植物を世話することを楽しめる人が減る一方で、多くの人は盆栽から離れていくようになった。数十年過ぎ、盆栽が好きになる若者が少なく、当時から盆栽を続けていた愛好家は、70、80 年代の高齢者になった。盆栽愛好家の高齢化により、日本の国内盆栽市場の売上高は全盛期の 1/6 に減少した。ただ近年、盆栽のオンライン販売は静かに台頭している。

それで、盆栽ファンたちには盆栽を手放ししなかった理由は何だろうか？

盆栽の魅力に惹かれて

私は、トヨタ自動車の定年者活動施設に活動している盆栽愛好家サークルを訪ねてみた。これは、平均年齢 70 歳以上の盆栽仲間のグループで、会長の安藤栄さんは 30 年以上の「盆栽」のファンと教えられた。

盆栽の手入れを教えている安藤栄さん

安藤さんは 30 代から盆栽を始め、趣味として盆栽技術の研究に専念していた。盆栽は人間と自然と一緒に木を成長させるプロセスであり、終わりのない芸術だと安藤さんは言った。人工的な介入は、木が美しい形で成長する助けであり、数年後の成長姿勢を想像しながら、それに合わせて剪定するなどの手作業を加えるのである。

月に 1 回グループ活動で、盆栽の楽しみを分かち合う

多くの盆栽愛好家にとって、樹木を創る、育てる、鑑賞するのは盆栽の 3 つの楽しみである。自然の風景を植木鉢の上に再現し続ける作業は、深い森に威厳に満ち溢れる木、海岸に伸びやかに揺れる木、中庭に静けさに包まれている木、崖のそびえ立つ木、いろいろ自然の



中で見られる大木の姿を想像しながら、それぞれ木の気質と個性に応じて、盆栽の物語を作る。土、水、光、風の自然の恵みを受け、時間の経過とともに人口な痕跡が徐々に消えていく作品は、説得力のある自然に美しい作品になる。

なぜ盆栽の趣味を続けられるかと彼らに尋ねてみた。みんなさんは次のようにいろいろ教えてくれた。盆栽は基本的に屋外に植えられており、日光浴や風雨に耐える成長には人為的に到達できない未知のところがあるのは絵画と彫刻との違うところである。小さな苗木から穏やかなまたは雄大なスタイルを創るには、人的な力と自然の力が合わせ、長い時間と忍耐が必要である。この終わりのない創造と期待感、そして四季を通し自然の変化や生命の輝きを感じとることができるのが魅力だと言う。



樹齢 60 年の真柏（はるちゃん盆栽園の作品）

長年の盆栽には、所有者が注いだ時間とケアそして努力が満ち溢れてある。盆栽は、自然に対する慈愛を喚起し、知らず知らずの間に人の考え方が変わり、心が浄化され、静かでシンブルな日々を送れるようになる。

日本盆栽は世界に向けて

1964 年の東京オリンピックと 1970 年の大阪万博に「造形芸術」として、日本の盆栽は海外



から注目され始め、盆栽の日本語発音「BONSAI」の独特な日本文化はヨーロッパを中心とした盆栽愛好家を魅了した。近年、「盆栽メッカ」を訪れることは、外国の盆栽愛好家が日本を訪れることの目的の 1 つになっているほか、長年日本盆栽の修行してきた欧米人の日本盆栽園主も見られている。

盆栽を修行する外国人

盆栽園に多くの外国人見習いとは対照的に、日本の見習いはまれである。盆栽業界が下向けのため後継者が不足である問題は非常に深刻である。名古屋にある 120 年余りの「愛知園」の 4 代目の園主、田中淳一郎さんの説明によると、近年、訪ねてきた顧客は外国人ばかりで、最も多くのは中国バイヤーである。彼らはほとんどの種類の盆栽に興味を示し、高価な商品を多く購入してくれるが、盆栽園主として気持ちは複雑である。

愛知園園主田中淳一郎

中国バイヤーに買われた盆栽

すべての良い盆栽は 10 年以上、あるいは数十年にわたって育ててきたものであり、それが欲しいと言って作ることは不可能である。優れた盆栽作品が海外に買われてしまうと、日本に良いものが少なくなる。最も心配なのは、純粋な商業活動の背後に、新しい所有者が盆栽についての知識や理解が不足であると、盆栽が痛んでしまうことになる。盆栽は価格がついた商品だけでなく、世代から世代へと受け継がれる生きた芸術の結晶でもある。外国に行った盆栽が大事に育てられ、その価値が続くことを願いたいと田中さんは話した。

盆栽の郷の振興

日本の盆栽業界は、さまざまな活動を通じて盆栽の活性化と盆栽愛好家の増加に取り組んでいる。記事の冒頭で紹介した高松市は、盆栽と生産地の振興を地元の産業方策として「高松盆栽の郷」づくりを取り入れた。2020 年 4 月にオープン予定の総合施設「盆栽の里」は、日本国内の最新・最大の盆栽施設として、国内外に向け、情報発信、体験・交流・研修、展示・販売の 3 つ機能を持つ。様々な課題解決の推進するなか「高松盆栽の郷」を日本の盆栽文化の中心地になることが期待されている。

高松市毎年 10 月の盆栽大会

高松盆景展示会の小型盆栽商品（以上 2 枚の写真は岡田利幸さん提供）



また、盆栽の魅力を一般市民に示すために、全国各地で盆栽展やワークショップが開催されている。盆栽業界はそのような努力が長続きしなければならないことを知っている。

展示会の歴史が日本の二番目となる‘銘風盆栽展’は毎年1月名古屋で開催される(2020年第90回)

最も有名な盆栽展は、毎年2月に東京都美術館で開催される「国立風盆栽展」で、日本最古の歴史を持ち、かつ最大の盆栽展とされ、宮内庁の盆栽をはじめ日本全国の盆栽の最高峰の展示会であることは海外でも広く知られている。この展覧会は80年以上の歴史の中、盆栽芸術の向上と日本の伝統文化の発展の役割を果たしている。

取材を受けてくれた盆栽関係者たちはこう言った。どの産業も繁栄と衰退のサイクルを持つだろう。日本人愛好家の高齢化が心配であるが、盆栽には日本の美意識を呼び起こす力もあると信じている。時間の経過とともに、盆栽を忘れた日本人は、いつか世界各国から盆栽の楽しみ方を学ぶ必要があるかもしれない。

彼らはまた、中国の盆栽愛好家が日本を訪れ、交流することを望んでおり、盆栽文化は世界の愛好家に愛される中長く続くことを期待している。

文/照片 [欧陽蔚怡](#) 【社団法人 異文化理解研究会】 法人代表
编辑修改 JST 客观日本编辑部